

プチ・ジャンとかえる フランス

昔むかし、あるところに、たいへん年とつた王さまとお妃がいました。ふたりには、王子が三人いました。いちばん上の王子は、プチ・ジャンといいました。

ある日、プチ・ジャンは、牧場を散歩していました。池のそばまで来ると、水の中から、クワック、クワック、クワックと、何かが呼んでいるのが聞こえました。プチ・ジャンが、

「いったいあれは、なんだろう」というと、草刈り^か人が、

「おや、王子さま。あれはかえるですよ」と教えてくれました。

「そうか！」

プチ・ジャンは、池にむかつていいました。

かえるよ かえるちゃん

ぼくのかたに とんでおいで

ぼくの妻に ならないか

かえるは、プチ・ジャンのかたにとびのりました。プチ・ジャンは、かえるを部屋に連れて帰り、水をいっぱい張った鉢^{はち}に入れてだんろのそばに置きました。そして、毎日水をかえて、たいせつに世話をしました。

あるとき、王さまが、三人の王子たちをお城によんでいいました。

「わしは年をとつた。そこで、城の周りを七回巻くほどの布を持ち帰つた者に、この国をゆずろうと思う」

プチ・ジャンは、屋敷にもどると、

（さがしに行くのはめんどうだな）と思いながら、だんろのそばにすわっていました。すると、とつぜん、かえるが話しかけてきました。

「どうしたの。いったい何があつたの」

プチ・ジャンは、おどろいて、

「おや。かえるが話をするなんて、知らなかったな。たとえ何があつたか話しても、君にはどうすることもできないよ」といいました。

「ことがらによりけりよ、話してごらん、プチ・ジャン」

「じゃあ話すけど、お父さんが、城の周りを七回巻くほどの布を持ち帰つた者に、この国をゆずるといふんだ」

「じゃあ、やってみましょう。すぐにもどるから、待っていて」

かえるは、鉢からとび出して、ピョン、ピョン、ピョン、ピョン、どこかへとんで行きました。

かえるは、自分の名づけ親の所に行きました。

「こんにちは。名づけ親さん」

「こんにちは。わたしの名づけ子や。何の用」

「夫のお父さまが、城の周りを七回巻くほどの布を持ち帰った者に、国をゆずるとお約束やくそくなされたのです」

「じゃあ、この銀の箱をあげますから、これをあなたの夫にわたして、お父さまに開けてもらいなさい」

かえるは、箱を受けとって、プチ・ジャンの所に持って帰りました。

「あした、この箱をお父さまの所に持って行って、開けてもらいなさい」

「こんな箱、お父さんは、何千と持っているよ」

「かまいませんから、持つてお行きなさい」

つぎの朝、プチ・ジャンが、父親の所に行くと、もう弟たちが来ていました。初めに、一番下の弟が布を広げました。美しい布でしたが、城の二巻分しかありませんでした。つぎに、二番目の弟が布を広げました。三巻分しかありませんでした。王さまは、

「プチ・ジャン、おまえの布はどこにあるんだ」とききました。プチ・ジャンは、ポケットから銀の箱を取りだして、王さまにわたしました。

「これを開けてください」

王さまがふたを取ると、箱の中には卵が入っていました。卵を割ってみると、くるみが出てきました。くるみをわると、中から布を巻いた小さな棒ぼうが出て来ました。布をつまんでひき出すと、布はどんどん広がって、この世にかつてないほど美しい布が引き出されました。それは、城を七巻した上に、まだあと七巻するほどでした。王さまは、

「プチ・ジャンの勝ちだな。だがもうひとつ課題を出そう。おまえたちのうちで、もつとも美しい鳥をさがして来た者に、この国をゆずろう」

プチ・ジャンは、家に帰ると、だんろのそばにすわって、考えこんでいました。するとかえるが、

「どうしたの。何があつたの」とたずねました。

「お父さんが、こんどは、もつとも美しい鳥をさがして来た者に、この国をゆずるといふんだ」

「じゃあ、やってみましょう。すぐにもどるから、待つていて」

かえるは、鉢からとび出して、ピョン、ピョン、ピョン、出て行きました。

かえるは、名づけ親の所に行きました。

「こんにちは。名づけ親さん」

「こんにちは。わたしの名づけ子や。何の用」

「夫のお父さまが、こんどは、もつとも美しい鳥をさがして来た者に、国をゆずるとお約束なされたのです」

「じゃあ、この銀の箱をあげますから、これをあなたの夫にわたして、お父さまに開けてもらいなさい」

かえるは、箱を受けとって、プチ・ジャンの所に持って帰りました。

「あした、この箱をお父さまの所に持って行って、開けてもらいなさい」

つぎの朝、プチ・ジャンが、父親の所に行くと、もう弟たちが来ていました。王さまは、ふたりの持つて来た美しい鳥を見てから、プチ・ジャンにいました。

「プチ・ジャン、おまえの鳥はどこにいるんだ」

プチ・ジャンは、ポケットから銀の箱を取りだして、王さまにわたしました。

王さまがふたを取ると、箱の中には卵が入っていました。卵を割ってみると、くるみが出てきました。くるみをわると、はしばみの実が入っていました。はしばみの実を割ると、中から千の色をした小鳥が飛び出し、部屋の中を飛びまわったかと思うと、王さまのかたに止まって、この上もなく美しくさえずりました。王さまは、

「やはり、プチ・ジャンの勝ちだな。だが、最後にもうひとつ課題を出そう。この世で一番美しい王女を連れて来た者に、国をゆずることしよう」といいました。

プチ・ジャンは、すっかりがっかりして、家にもどりました。

「どうしたの。何があつたの」

プチ・ジャンは、

「うるさいな。踏みつぶすぞ」といいました。

「そんなことをしたら、あなたは幸運を踏みつぶすことになるわ。何があつたか教えてちょうだい」

「お父さんが、もつとも美しい王女を連れて来た者に、この国をゆずるというんだ。かえるのおまえを連れて行けば、笑い者になるだけだ」

「でも、やつてみましょーよ」

かえるはそういつて、庭に出ました。そして、かぼちゃの中をえぐって馬車を作り、六匹のはつかねずみにひかせました。それから、いつびきのねずみを御者ごしやにして、とかげを従者じゆうしやにし、みつばちを六匹、侍女じじよにして、かぼちゃの中に入れました。それから、自分も乗りこむと、かぼちゃの馬車を走らせました。

「さあ、プチ・ジャン。ついていらつしやい」

プチ・ジャンは、大笑いして見ていましたが、遠く離れてついて行きました。

かえるが名づけ親の家の前を通つたとき、かぼちゃの馬車は、水たまりに落つちてしまひました。すると、はつかねずみはちゅうちゅう鳴くし、ねずみはうなるし、とかげはしゅうしゅう鳴くし、みつばちはぶんぶんうなるし、かえるはクワック、クワック、クワック、クワックと鳴きました。

このさわぎを聞いて、名づけ親が外へ出てきました。名づけ親は、姉さんの妖精ようせいの所へかけつけて、いいました。

「お願いだから、あの子の不幸な運命を変えてやってくださいな」

年とつた妖精は、頭をぐらぐらさせながらやって来て、水たまりにはまつているおかしな馬車の一行を見ると、大笑いしました。そして、

「かぼちゃは、この世で一番みごとな馬車になるように。はつかねずみは、この世で一番美しい馬になるように。ねずみはこの世で一番りっぱな御者になるように。とかげは、この世で一番りっぱな従者になるように。みつばちは、この世で一番美しい侍女になるように。かえるは、これまでも見たことのないような美しい王女になるように」といいました。

そのとたん、かえるは、美しい王女になり、美しい馬車に乗って、りっぱな従者たちとともに、大急ぎで王さまのお城に向かいました。

とちゆうまで来ると、王女は、プチ・ジャンをふりかえつて、

「早くいらつしやい」とよびました。プチ・ジャンは、それがだれだかわかりませんでした。けれども、馬車に追いつくと、王女が、

「わたしのとなりにお座りなさい」といいました。

プチ・ジャンは、お城に着くと、王女といつしよに王さまの所に行きました。王さまは、

「これで、プチ・ジャンが王になることが決まつた」といいました。

王女は、プチ・ジャンに、

「もしもかえるを踏みつぶしていたら、幸運を踏みつぶすことになるらう」といいま

した。そこで、やっと、プチ・ジャンは、王女があのかえるだったことを知りました。

それから、結婚式がこのうえもなく盛大に行われ、みんな、いつまでも幸せに暮らしました。
もし死んでいなければ、まだ生きているはずですよ

村上郁再話

資料『フランスの昔話』新倉朗子訳／大修館書店